

十五の私にできる納税

木更津市立太田中学校3年 鈴木 さくら

昨年の春、私はSDGs（エスディーゼズ）について学ぶ研修に参加し、開発途上国のインドネシアを視察しました。この研修は、自分の目で現状を見て、それぞれの国の抱えている問題を知ること、自分には何ができるのかを考えることでした。SDGsとは、世界が公平に今も将来も幸せに暮らせる持続可能な社会を目指して、一人ひとりが行動を起こそうというものです。そして、全てに共通するテーマは「誰も置きざりにしない」です。一部の国や一部の人が幸せになるのではなく、人間も生き物も自然も、未来のよりよい生活を目指そうという意味があります。

現地では、スマトラ島のジャングル地域に暮らす子どもたちの教育事情や、水・トイレの衛生と安全についての厳しい現状を目の当たりにしました。社会保障が不十分で、小さなコミュニティーに対する下水道の普及の遅れが深刻な問題となっていました。また、学校を建てても、親の就労事情により、弟や妹の面倒をみるために学校に通えない実情があることも知りました。私は、日本での自身の生活環境の安全・安心・インフラの充実など、当たり前と思っていた生活環境のありがたみを改めて感じました。

私たちの生活の安全が税金によって維持されていることは学校でも学んでいます。社会全体で助け合う「税」という仕組みが、日本国内だけでなく、国際協力活動の資金として使われていることも学習しています。先進国と位置づけられている日本でも、国内資源だけでは生活できません。食料自給率は低く、エネルギー資源の八十パーセントを外国に頼っています。世界の国々が、地球という一つの生活圏を共有している以上、足りない資源や技術、食物、資金等で、お互い助け合うことが不可欠です。一部の国だけ、一部の人が幸せになるのではなく、皆が幸せに暮らせる社会づくりに協力していく責任が私たちにはあります。それらを実現するために必要なお金こそが、一人ひとりの納税によってプールされるのです。十五の私も、日常的に税を納め協力しています。それは「消費税」です。

皆、貯金が増えることは喜ぶます。しかし、税金という響きは「とられる」というマイナスのイメージに捉えられがちです。でも税を正しく理解すれば、なくてはならない助け合いの貯金と捉えることができます。私が買い物をした時に納める消費税も、「とられる税」ではなく、「相互援助のための助け合い貯金」に協力していると捉えることができます。

十五の私にできる納税ー買い物プラス消費税に「ありがとう」そして「よろしく頼む」という思いを込めて、これからも、日本と世界を救う「税」に向き合っていきたいと思います。